



Member's Open Space



古川柳に見る江戸の話体川柳

●美咲歯科医師会会員
雨田 実

どら息子。^{こせんりゅう}古川柳に登場する息子は、真面目に仕事に精を出すような者は、ほとんどいない。物事を斜めから見るのが特徴でもある川柳では、生真面目な息子では詠材になりにくいからである。

「あれと出るな」と両方の親が言ひ（安九）

安九は安永九年の作のこと。親はひいき目に見る息子の見るので、外出すると悪所へ行ったり、赤い顔をして深更に帰宅するのは、連れになる息子の友人が悪いからだと思う。そこで注意を与える。

ところが、その相手の息子の親の方でも、同じように思っている。双方の親が、息子の友だちこそが悪友なのだと思っているところが、「あれと、出るな」という言葉になるのである。

「へえけえに行く」と息子は内を出る（安十四）

どら息子は口実を設けては外出の機会を作る。

外へ出さえすれば気のすむまで帰宅しない。俳諧に出かける。と言って外出するのであるが、江戸訛りの発言では「へえけえ」となるが、わざとこのように訛ることが、遊びの通人の言葉遣いなのである。俳諧の連座に出れば半日や終日を要するので、これを口実にして、吉原などで遊びをするのである。息子の言葉を使用して、親父が説教をしている。「へいけい^やを止めにしやれ、と親父言ひ」の類句が面白い。

「花会に行くと誘いに来てくれる」（安七）

花会とは唄、浄瑠璃、踊などの名広めの会合で

ある。このどら息子は、花会が開かれるとの情報が入ったので、これ幸いとばかりに、友人に頼み込む。「花会に行こうと、誘いに来てくれ。あとは巧くやるから」と友だちをダシに使うのである。

全句が話体^{わたい}で、すべて息子の台詞から成り立っている。これを話体川柳という。

「そのごぜえすを、やめおれ」と親父言ひ

遊びに徹して通人言葉を遣いこなす息子。親父からみれば、着衣も髷^{まげ}も当世風にして、しかも「ごぜえす」などと親に対しても変な言葉を言い慣らすので、行く末が思いやられる。そこで機会を捉えて説教する。「そのごぜえす、などという言葉遣いはやめおれ」とさとしたのである。ございますから、ごぜえます、さらに、ごぜえすと転訛した言葉である。洒落本の「青楼^{せいろう}楽美種^{たのしみぐさ}」（安四）に「花まちが所から文がきた。返事をちょっと書いてくんねえ？これは、どうでござえす。色男が返事を人に頼むなさあ、大わらいだぜ」という会話があり、そこに「ごぜえす」が活字されている。遊里へ精勤する男たちが使った言葉遣いであった。

「こりや、黙れ、月見は内でなぜ出来ぬ」

吉原には紋日^{もんび}（特別の祝日）があり、八月十五夜と九月十三夜は重要な紋日で、遊女たちはサービスに努め、両夜とも登楼するように仕向ける。

吉原の月見は大紋日の一つで、八月十五夜に来た客は、必ず九月十三夜に来なければならず、九

月十三夜に來ないことを「片月見」と稱して、客の恥とされた。吉原大全に「片月見をいみて、明月をしまいたる客は、後の月も約束する事なり」とある。兩日に出かけると、約二十兩ぐらゐの出費となるから、これは大散財となる。下女の年俸が約二兩ぐらゐの時であるから、いかに莫大な金額かは推測出來よう。「月見だに、何の御用と大工來る」という句にもあるように、親の堪忍もこれまでと息子を座敷牢に軟禁する。「余り甘ますぎましたよと檻へ入れ」親のたびたびの意見も効がなく、悪所通いや賭博などの浪費を重ねると、親たちも強行手段を講じる。出入りの大工に頼んで、座敷に木杵の格子を入れ、牢のやうに設らえてここに軟禁する、これを俗に座敷牢という。この座敷牢に放蕩息子を幽閉した時に、しみじみとした母親の述懐が「余り甘ますぎましたよ」という発語である。これで息子の素行が少しでも改まればよいという親の折檻の一つである。類句に「けつけつの毛が無くなってから座敷牢」というのもある。

「出てうしよう、なんじ、元來蜜柑籠がんらいみかんかご」(宝九)

放蕩息子に対する親父の最後通牒である。親の意見も座敷牢もまったく効果なく、反省の色がない。そこで、息子を勘当することになる。「出てうしよう」は「出て失せろ」の訛である。「俚言集覽りげんしゅうらん」には「うせろ、去らしむる辞ことば。又來たらしむる辞、反語也」とある。「なんじ」は汝で「人をさして言ふ詞なり。古にはなむちといひし語ならんか」とあり、相手を指し示す語である。蜜柑籠は、当時捨て子は蜜柑籠に入れたところから、捨子の別称である。親父の究極の発言で、放蕩息子に対して「この家から出て失せろ。お前はもともと捨て子だったんだぞ」と述べたものである。実際は自分の子であるのに、お前のような不孝者は俺の

子ではないことを強調するため、蜜柑籠を持ち出している。句全部が話し言葉である。母親は母性本能が濃厚であるため、ただおろおろするばかりである。「行灯あんどんの横手で母はそっと泣き」の句のよゝうに涙するばかりである。「どら息子、耳は馬つら、面は蛙で母こまり」勘当は蛙かわずに水のかけ治め。「近所にはいるな、と母は貳兩貸し」家を出たがあてのない息子である。あっちこっち渡り歩いて結局は母親に金銭をもらいに來る。「母親はもったいないが騙しよい」という名吟が、どら息子の心情をみごとに捉えている。また、だまされることを先刻承知していながらつくす母親の心情を鋭くうがっている。「当分は來やるなと母一つ脱ぎ」着物を質草にして金銭を工面して与える。当時、勘当された息子の行く所は鰯漁の盛んな銚子と相場が決っていた。「近所にはいるな」と言う母の言葉は、銚子で働いて來いと言う母親の万感の思いが籠められている。「銚子言葉で、御すいりようなされまし」息子が銚子で働いているうちに父親が大病になり、ひと目会いたさに勘当を解くことになる。

息子は飛ぶよゝうに江戸に戻ってくる。旅装束も解かず親の枕元に座り、前非を悔いて父親に詫び言を告げる。それが「御すいりようなされまし」なのである。現代風に言うと、これまでの行いを改めてまともな行動をしますので、私の決心を思いやして下さいという意である。しかも銚子訛りで告げるところに、苦勞した実直さが表れている。

こういう場面は多くの句に作られている。「大声で今銚子から着きました」の句もある。